

「無限なる呼び声－神への願い、神の祈り」

竹部弘(教学研究所)

はじめに

* 「無限」の経験

ここ一、二年、人間を超えた無限なるものと接する経験について考えています。今年の紀要に載せました論文の、第三章の部分をお話しします。

一つ、金光大神、子供、孫のこと願い。何事も巡り合い。病気は時々にできても、治ること願い。何事ありてもびっくりすな。日天四がおる間は苦世話にすな。親のようなもの。子供が、親がおればよからうか。天地金乃神がおらぬようになったら闇。日天四が死ぬることはあるまい。万劫末代、代々子孫繁盛願い、とお知らせ。(明治15年旧2月4日のお知らせ、覚帳26-3)

* 教祖伝『金光大神』の叙述

「何事も巡り合わせで起きてくる。もし病気になったら、治るように願え。何事があってもびっくりするな、苦にやむなど、天地の中で、人間の親としての天地金乃神と共に生きることを諭された。起きてくることを、天地の巡り合わせと受け止めることによって、天地の動きと一つになること、また、代々子孫繁盛を願い続けることによって神のはたらきと一つになることを、神は金光大神に呼びかけられた。」(480頁)となっています。

* 語られていることと語られていないこと

特に難しいこともわからないこともないお知らせです。しかし、お知らせというものは、あるいは言葉による語りというものは、全てそうかもしれませんが、このお知らせにも、語られていることと語られていないことがあります。このように語られる言葉通りの事柄に、その行間からどのような様相が窺えてくるのでしょうか。

、「願い」の射程

* 子供・孫のこと

このお知らせは、「子供、孫のこと」の願いに始まり「代々子孫繁盛」の願いに終わるというように、一貫して金光大神の一家の問題に終始しています。そのことは、例えば「天地金乃神、生神金光大神、日本開き、唐、天竺、おいおい開き」(覚帳21-27-6)、「万国まで残りなく金光大神でき、おかげ知らせいたしてやる」(覚帳26-22-3)などのお知らせに比べて、空間的広がりや社会的視野が欠如しているとの印象を与えるかもしれません。しかし、子供・一家とは、人間の生や生活・関係がそこから始まる一番最初の場であり、むしろそこからしか始まらない場と言えましょう。

* 金光大神の死の迫りと、残される者のこと

「病気は時々にてきても、治ること願ひ」とありますが、「覚帳」の直前の記述には、この年正月早々に金光大神と一家の体調が優れなかったことが記されており（覚帳26-1）、そうしたことを踏まえての教示とも言えます。また、この2週間後に宅吉の長男撰胤が病気に罹り約1ヶ月の間一進一退を繰り返すという出来事がありました。その経過は正にお知らせ通りに快癒する結果となりましたが、前年には2月にこのの出産（死産）があったり（覚帳25-2）、閏7月には萩雄の長男桜丸の死もありました（覚帳25-22）。金光大神の子女である 金吉・萩雄・宅吉・くら・このらの行く末にも気がかりなものがあったでしょう。一方で新たな命の誕生もあります。前年旧11月に宅吉の長女ひふのが誕生（覚帳25-35）、このお知らせの数日前には萩雄の長女式子が誕生（覚帳26-2）。更に10月には、このが長女逸恵を出産することになります（覚帳26-23）。

次に、金光大神の健康状態を窺うと、明治10年旧8月以降、断続的に下痢と便秘が繰り返され（覚帳23-6）ていましたが、明治14年旧8月9日には「大神虫入りた」（覚帳25-24-1）とのお知らせがあり、既に明治9年頃から予告的に語られていた金光大神の生死の境（「旧暦と新暦とがあるが、先で両方が九日十日と連れ合っていく時がある。その時には神上がりする」理 伍慶21）へ、一步近づくことになります。

* 死に近づく金光大神と、死ぬことのない神

このように、金光大神自身に関しては、既に死に向けた歩みの次なる段階に入っていることが自覚されていたと考えられます。

それに対して「親のようなもの」とされる神は、「日天四がおる間は」「天地金乃神がおらぬようになったら」などと、あたかもいなくなることもあり得るかのようにより予期させる言葉の後に、またそれを覆して、「日天四が死ぬることはあるまい」と否定されます。それに対して、子供、孫のことを願う親としての金光大神は、「おらぬように」なる道を行っていると意識させられています。こうして「親がおればよからうが」という一句により、「死ぬこと」のない「日天四」と、その逆の金光大神とが、同時的・対照的に示されることとなります。

* 「何事も巡り合い」

このような天地が続いていくという長い時間の流れと、金光大神の死が差し迫った時間、しかしまた子供・孫が続いていく時間、そして最後に「万劫末代」と、家の単位としては神話的で非現実的とも言える長さが表されており、「無限」と言ってもよい時間が醸し出されます。

そのような中で、そのような状態に向けての「何事も巡り合い」というお知らせは、病気の由来に留まらず、生存・生活万般に亘る様々な出来事に関して語られているでしょう。

、「無限」の感得と示現

* 「神はいる」と「願え」

ところで、病気ができたら治るように願えとは、他に願ひようがないとも言える程に、

一見平凡と言えはこの上なく平凡です。しかし、このお知らせでは、三度繰り返される「願え」に対して、「治してやる」とも「かなえてやる」とも言われません。ただただ「神はいる（いなくなる）」ということが繰り返されます（引用文の下線部、部参照）。

かつて明治6年のお知らせでは、生神金光大神を「差し向け」る宣言がなされ、それは神による救済の意志の発動として、「巡り合わせで難を受け」る氏子に対して「おかげを授け」るべき「差し向け」でありましたが、ここでは「巡り合い」に委ねるお知らせがなされるような印象を受けます。

もっとも、それはお知らせの言葉の上だけのことではないかと思われるかもしれません。参考までに次のようなお知らせと対照してみます。

天地の間のおかげを知った者なし。おいおい三千世界、日天四の照らす下、万国まで残りなく金光大神でき、おかげ知らせいたしてやる。（明治15年旧10月15日、覚帳26-22-3）

このお知らせは、日本に留まらず世界へ向けられた「御神願」の表明と見なされてきたものですが、その前段では「天地の間のおかげを知った者なし」と言われています。このことは、そもそも氏子が天地のおかげを知らないという、そのことの打開のために金光大神が「差し向け」られて、10年近く経った上でのことです。ここに、高らかな宣言と見える一方に、そのことが果たされ難いことへの、絶望とはいえぬまでも、大きな失望や憂いを感じられます。

今日のテーマとしているお知らせは、同じ年の2月であり、時期は少し早いですが、そのような気分は共有されていると思われます。そして、しかしまた、そのような失望や憂いを抱えながら、その上で、「神はいる」「願え」と繰り返されていると言えます。

* 天地の巡り行きの中で、変わるものと変わらぬもの

お知らせで天地金乃神と共に示された日天四は、毎日の生命の流れの中で、時を刻むように進んでいく、そのような仕方で「ある」ことを示し、まさに回転・循環という形での天地の運行の秩序と合致するものを象徴していると言えましょう。先に述べた「何事も巡り合い」ということも、このような形での天地の運行と無関係ではないでしょう。

そこでは「巡り合い」は、変転しつつ続いていく大きなものを予感させます。「日天四」が昇っては沈む毎日の繰り返しから四季が移り年月が流れる中で、親から子へ・子から孫へと命が受けつがれ、また時は巡り人は変わり、天地が循環し続いていくその中に、お知らせの主調音として「神はいる」、「神に願え」と繰り返され、変わりつつ変わらぬものが示されます。

* 「神はいる」と「願え」

そしてまた、子供・孫のことを願えという呼びかけは、金光大神が親として子供・孫のことを願う関係から、「親のようなもの」である神を通じて、いつの間にか神が人間を願う関係へと移行するかのようであり、願う本人たる金光大神の生死を超えて願われるべきことの知らせです。そのような意味で、「願え」と繰り返すお知らせは、人間の願いの源が神からの呼びかけであること、また願いを促すお知らせが祈りそのものの発露であるよ

うな表現であることを示しているでしょう。

私達は、時として、本当に大変な問題、願ってもどうにもなるものではないと思えるような事柄に出会います。そんな時でも、いや、そんな時にこそ、思い起こし、心を寄せたいお知らせです。「神はおるぞ」と「願え」の繰り返し。私達に代わって、金光大神が神様から聴き受けられ、書き記されたと思えます。

* 額づく姿勢

このお知らせから浮かぶのは、金光大神の平生の、慕わしい姿です。

ちょっと頭の中で、ある場面を想像してみてください。明治15年旧2月4日の金光大神広前です。近藤藤守先生が初参拝の時に、「なんと、このような粗末な小屋に」と驚かれたという広前で、金光大神が御祈念されている。映画のように、照明を暗くしていきますと、広前の建物が消えて、暗闇のなかに宇宙の星々が浮かんでいきます。言ってみれば、普通は広前の建物があり、その建物は、大谷、岡山、日本の風土の中にあり、自然の中にあり、というように背景が広がっていきませんが、それらが順々に薄皮のように世界の表面から剥がれていくと、宇宙そのまま、天地そのままの中に、独り金光大神が居られる場面です。天地の様子は時には春の景色になり、夏の景色になり、色々あるとしましょう。金光大神広前にあって、そして天地の恵みもあり、時には狂いもあり、いろいろなものが渦巻く天地の中で御祈念されている金光大神に対して、一方で「願え」と繰り返され、他方で「神はいるぞ」と繰り返されます。「何事も巡り合い」と言われるように、四季は巡り、人が生まれ育ち、死んでまた生まれる。それは金光大神に知らされ自覚された内容であると共に、ここに語られた形で金光大神が生きている世界の地肌が現れた、天地そのものが示現することでありましょう。

終わりに

最後に、このお知らせを鏡にして感じられることを申します。

私は、教学研究所の裏庭の一部で小さな畑を作っていますが、その作業中、ふと心の中に自分自身への奇妙な問いかけが浮かんだことがあります。それは、もしも自分のいのちがあと1ヶ月と宣告されても、畑にこの苗を植えるだろうか、というものです。収穫を見ることがないであろう、あるいは花の咲くのを見ることのないであろう種をまくだろうか。そのことからすると、まだ顔を見ることもない子孫たちのことを願うということは、たとえこの身がなくなっても、この祈りは生きるということへの信が形になった姿ではないかと思えます。

またそれは、普通なら終わりとなるようなところが、実は信心の上で始まりであるような信仰の姿、金光大神の生涯がその繰り返しであった、そのような信仰の姿でもあると思えます。